

世界動物文学全集

4

熊と少年

森に消えたシカ

滅びゆく川の物語

世界動物文学全集

4



講談社

世界動物文学全集 4 熊と少年
森に消えたシカ
滅びゆく川の物語

昭和54年2月16日 第1刷

著者 ウォルト・モーレー
ヘレン・フーパー
ロバート・マーフィ

訳者 藤原英司
日本リーダーズダイジェスト社編集部

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話東京 (03) 945-1111 (大代表) 振替東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 1500円



©藤原英司 日本リーダーズダイジェスト社編集部 1979年
Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-405049-2253 (0) (文2)

目次

熊と少年 5

森に消えたシカ 167

滅びゆく川の物語 221

解説・藤原英司 355

装幀 蟹江征治
イラスト 田中豊美



熊
と
少
年

ウ
オ
ル
ト
・
モ
ー
レ
ー
藤
原
英
司
訳

GENTLE BEN

by

Walt Morey

Copyright © 1965 by Walt Morey.
Japanese translation rights arranged
by KERN ASSOCIATES, Sagamihara

まえがき

この物語は、今日のアラスカが、まだアメリカの正式の州になっていなかったころ、すなわち、准州だった時代を背景にしたものである。

当時アラスカはアメリカにとって最後の大きな辺境地帯であった。あらゆるものが、きわだった対照をなしていた土地で、谷間には花が咲き、イチゴが実っているかと思うと、その谷の上には巨大な氷河がおおいかぶさるようになっていた。

森や灌木の茂みにおおわれた山脈があるがわには、でこぼこひとつ見あたらずな、まっ平らな広漠たるツンドラの原野が果てしなくつづき、暑い夏の日に、底しれぬ静寂が極北の自然の奥深く、いっさいのものを沈黙の中に包みこむかと思えば、冬には一変して、骨までしみとおるような寒風が、うなりをあげて全土を吹きまくる。

人びとがいまだに、犬ゾリやカヌーで旅しているいっぽうでは、探鉱者たちが近代的な飛行機をかって、人跡未踏

の奥地へはいりこんでいくといったぐあいである。

そして必要にせまられて、そういうところに住んでいた人びとは、いずれも頑健な不撓不屈の人びとであった。古来新しい土地にわけいった数多くの開拓者たちのように、氣力体力ともに旺盛な人びとだったのである。

この物語の舞台となったオルカ市という名前の町は実在しない。しかしアラスカ沿岸にいくつもあった当時の漁師町は、どれをとっても、このオルカ市のイメージを、そのままあてはめることができるはずである。

当時のアラスカでは、魚泥棒はごくあたり前のことであり、一般にそれがひとつの職業として、なかば公認の形で存在した。だが、むろん罐詰工場の連中と魚泥棒との葛藤は、数かぎりなくあり、時にそれがおたがいの破滅をもたらすこともよくあった。法律はあってもないのと同じであり、古人がよく言ったように、「アラスカへ行きさえすれば、もし本気でその氣になるなら、なんだってできないこととはなし」という状態だったのである。

著者

第一章

少年マーク・アンダーセンは、毎日、今日こそあそこで立ちどまらないことにしようと、自分に言いかけせる。彼はその小屋のそばを、中をのぞかないで、まっすぐ通り過ぎていくことにしようと思う。だが毎日午後二時ごろになると、やはりあそこで立ちどまることにしようかなと考えはじめた。そしてつぎに自分が気づいたときには、もう小屋の前に立ちどまり、両手に教科書と紙袋を持っただけ、大きく開いている戸口から暗い小屋の中をじっとのぞきこんでいるのだった。

マークはこのことが父親に知れたらどうなるかわかっていた。しかし彼の心の中では、どうしてもその小屋の中へはいりたいという気持ちが、激しくうずいていた。その苦しいあせりにいた気持は、ちょうど固い壁に穴をあけようと、やっきになって壁をかじっているネズミの気持ににていた。そして結局そのやむにやまれぬ気持が、やがて父親に対するおそれを、心のすみへ追いやってしまった。

マークは自分の家のほうを横目で見た。家は小屋の前の道を何百メートルか下っていったところにある。遠くに見える家の庭に、母の姿は見えなかった。また彼が見ているほうに面した台所の窓にも、母の姿はなかった。

母は今までいつもマークが学校から帰ってくる姿を見て

手を振ってくれたのだが、ここ数週間、そういうことがなくなっていた。マークはそのことが、なにか重大な意味をもっているように、ぼんやり感じていた。今もマークはちょっとした間、そのことを気にした。しかし、やがて暗い小屋の中へ体を滑りこませると、ほかのことはみんな忘れさってしまった。

「もう一度だけだ。今度ではんとうにおしまいにしよう」マークは自分にそう言いかけた。

冷たくかび臭い暗がりの中へはいると、一瞬目の前がまっくらになったように、なにも見えなくなった。マークは立ちどまったまま、なにかを待つように、じっと耳をすました。

やがて柔らかな足音と、乾いた藁（わら）がかさかさという音に混じって、鎖（かぎ）がからからと鳴る音が聞こえた。そして重い体が静かに近づいてきて、マークにすりつけられ、マークは危うくその場に押し倒されそうになった。それからマークが手にもっている紙袋がむしりとられそうになった。

マークは手さぐりで、そばへ来たものにさわった。ごわごわした荒い毛皮と、大きな頭にふれ、つづいてずんぐりした丸い二つの耳にさわった。やがてマークは暗さに目になれると、目の前にいる小山のような大きなクマの姿を、ぼんやり認めることができた。彼は両手でクマの太い首を抱きながら、小声でささやいた。

「今日、もうちょっとで来るのをやめるところだったよ。」

でもね、ベン。ぼく、お前にあえてほんとにうれしいんだ」

ベンと呼ばれたクマは、頭をひねって、紙袋に口をつけようとした。マークはそれを見て言った。

「わかったよ。でも、ちょっと待てよ」

ベンは首に鎖をつけられていた。その鎖の端は小屋のまんな中にある杣にくくりつけてあった。鎖はとても短いものだったので、ベンは小屋の入口の陽があたりところへでいくことができず、もう五年もの長い間、その薄暗い小屋のなかで暮らしているのだった。

マーク少年は杣のところへ行くと、鎖をほどこいてきて、入口の近くの別の杣にかけなおした。そうやるとクマのベンは、鎖につながれたままで、いくらか日の光を浴びることができたのだ。しかしマークは、いつも帰りがけには、鎖をまたもとのように奥の杣へ結びなおした。そうやっておけばクマの持主のフォッグ・ベンソンに、誰かが小屋へ来たかと疑われないですむからだだった。

マークはフォッグ・ベンソンを嫌っていた。ベンソンはいつも汚い身なりをしていて、たいいてい酒場でぶらぶらしていた。酒場では大声で話し、ほらを吹き、口論をした。マークの父は、そういうベンソンのことを魚泥棒だと言っていた。

マークはベンソンがクマのベンにいつも意地悪くしていることを知っていた。いつもベンを鎖につないだままにし

ていたし、時には何日間も餌をやらないこともあった。そしていざ餌をやるという時には、かび臭くなったパンの塊を床に投げだしてやるのだった。

マークはそういうベンソンを嫌っていたが、自分が小屋の中にはいっている時に、ベンソンに見つかるといふかもしれないと思ったことはなかった。町では引き網船をもっている男たちが、みんな忙しくしていた。サケ漁の季節が近づいてきていたからである。ベンソンもやはり、その漁期に備えて忙しくしていたので、マークはベンソンが小屋へくるなどとは思ってもみなかった。

今、入口のところへ鎖をつなぎかえてもらったベンは、開いている小屋の入口のところへ歩いていって立ちどまつた。暖かい日だった。空も大地も磨きあげたバンドの止めの金のように、新鮮な輝きに満ちていた。ベンはまぶしい日の光に、小さな目をしばたかせながら、大きな頭を左右へ揺り動かして、さわやかな春の空気を、敏感な鼻でかぎとってみていた。

ベンはまだ成長しきったクマではなかった。餌を十分与えられていないので、大きな骨組みのわりには、ひどくやせて骨ばっていた。しかしそれでもベンは巨大なクマだった。歩くと、大きな筋肉が明るい金色の毛皮の下でぶるぶると動くのがわかった。

マークは日の光がいっぱいにあたる小屋の入口に腰をおろして、持ってきた紙袋を開きはじめた。

「お前にぼくのサンドイッチをひとつ残してきてやったんだよ。それにお弁当を残した子も二人いたから、それもあるってきたんだ」

ベンはいそいそで袋をわきへ押しつけた。そしてマークの足にのせていたベンの前足をたたいて言った。

「座れ！ おすわり、ベン」

マークはそばの床をたたいた。するとベンは、大きな前足を両方とも前へ突きだして床へはいつくばった。

マークはどうしてベンがそんなことをするようになったのか知らなかった。彼が教えようとしたのは、伏せてなくて、お座りなのだ。しかしベンは、マークに命じられると、いつも床に腹ばいになってみせた。

マークは、サンドイッチを大きく割り、手のひらにのせてさしだした。ベンはそれをととも器用にすくいあげるのので、マークの手にベンの舌がくっつくことはほとんどなかった。ベンはサンドイッチを、つぎつぎと、舌を鳴らしてうまさうに食べた。そして、みんな食べ終わってしまったと、ベンはマークの手を鼻先で押して、もっと食べ物はないかと、あたりをさがした。

マークはからの紙袋を与えた。するとベンはその紙に残っている臭いを、鼻を鳴らしかぎながら、怒ったように細かく引き裂いた。そして、もうなにも食べるものがないことがわかると、前足の上に大きな頭をのせて外の明るい

春の景色を眺めはじめた。

マークはその時、急にジャミーがここにいればいいなと思った。ジャミーはマークの二つ年上の兄で、体が大きく、力もずっと強かった。二人でいるとき、自分たちがなにをして、どこへ行くかを考えてきめるのは、いつもジャミーだった。だがジャミーはもういない。しかしマークは、いつも考えているのと同じことを今考え、そしてベンに言った。

「ジャミーがいたらきつとお前のことを好きになるよ」

マークはベンのあごの下をなでてやった。ベンは首をのばし、目をとじて、まるでブタのような声をだした。心から満足しきっている唸りなのだ。マークはそれから、片手をベンの首にかけたまま、ベンの体によりかかった。そしてマークが指の先でのろのろと、ベンの丸い耳のつけ根を順番に撫でてやると、ベンは頭をひねって、二つの耳を順番に掻いてもらえるように頭をゆっくり傾けた。

「お前はきつと外へでていって、長い青草や根っこや、ゼン草を食べたいだろうな」マークは言った。

「今は春だ。クマはみんな、そういうものを食べて、夏の用意にお腹をととのえる時期なんだ。だけど、お前はそういうものを一度も食べたことがないんだろう」

マークはもちろん、ベンがそういうものを食べたことがないということを知っていた。フォッグ・ペンソンは、まだ生後六ヵ月の子グマの時にベンをつかまえてきた。彼は

その時、母グマを殺し、ちいさかった子グマを生け捕ってきて、町で見せ物にしたのだった。その時、子グマは死んだ母グマを求めて何時間も泣き叫んだので、ベンソンはそれをあざけて「うるせえベン」と名づけた。

ちょうどその地方に、以前、そういうあだ名の怒りっぽい変人がいたので、その名をとってつけたのだった。やがて子グマが大きくなり、きいきい鳴かなくなると、「うるせえ」というのが落ちて、ただベンと呼ばれるようになった。

「もし、お前がぼくのものなら、あの原っぱのすぐむこうにある流れへ連れて行ってやるんだがな。そこでは草がぼくの背丈の半分ぐらいになっているんだ。それから、根っこだって何だってあるよ。岩もたくさんある。いっしょにその岩をひっくりかえしたら、虫やネズミが食べられるんだけどな。もし、お前がぼくのもんだったら……」

マークは考えこむようにそう言った。彼ははじめてベンを見て、この小屋の前へ足をとめた最初の夜らしい、これと同じことを何度自分の心につぶやいたかしれなかった。彼は床にはいつて寝つく前に、たびたびそう考え、また学校にいてもそのことを考えることがよくあった。以前、書き取りの時間に悪い点をとったことがあったが、その時彼はベンのところへいくことを考えていたのだった。

その日授業が終わったあとで、女教師のティラー先生は、マークを呼んだ。先生の机の上にはマークが提出した

書き取りの答案がのっていて、先生はそれを見ながら頭をふって言った。

「マーク、あなたは半分も答えを書いていませんね。あなたはこんな字はみんな書けるはずです。だからあなたは書けないんじゃないかって書かないのね。それも昼間だというのにまた夢を見ているからよ。このごろあなたはよくぼんやりしているけど、何か気になることがあるの？」

「いいえ、べつに。ぼく、ただ……ただ考えているだけです」マークはあわてて言った。

「そう。今は春でしょ。学校もあとたった二週間だけで休みになるわね。でも休みになるまでは、ちゃんと勉強しなくては、だめよ」ティラー先生は、やさしく言った。

マークは今までに何度も、父親に頼んでベンを買ってもらおうと思ったことがあった。フォッグ・ベンソンはベンをじゃまにしているから、マークの父が買いたいと言えど、かえって喜んでくれそうな気がした。しかしマークが父にそう言う時には、自分が今までたびたびベンにあって仲良くなっていることも言わなくてはならなかった。それを言えば父親は怒るだろう。父のその怒った顔を見るのがいやなばかりに、マークはそのことを言いだせないでいた。

マークは父と仲よくなりました。それもただ仲良くなるだけでなく、ジャミーのように父親と気楽な仲になりました。ジャミーはきっと自分とはちがって大物なのだから

う。ジャミーは前の年の夏に船で出漁していた。そしてその後ジャミーが父といっしょに漁や船のことについて、一人前の男同士として話し合っているのを聞いて、マークはうらやましく思うことが、何度もあった。だが彼は自分ではジャミーのまねをすることができなかった。

マークはどうしても気が大きくなれなかったのである。彼は父の短気と、荒々しい言葉をおそれていた。父親が不機嫌になった時、その青い目でじっと見つめられると、誰でも心の中まで凍りついてしまうような気がした。だからマークは、父親との間には暖かい感情など、今後もけつして育つことはないだろうとあきらめていた。

しかしジャミーはマークにできないことをちゃんとやっていた。そうだ、ジャミーに話せばベンのことを頼んでもらえる。だがそれは考えてみてもどうにもならないことだった。

マークは頬をベンの広い額にこすりつけた。ベンの額は毛皮におおわれて岩のように固かった。マークは言った。「もしお前がぼくのものだったら、お前がアザラシみたいになるまると肥るように、たくさん食べ物をやるんだがな。そうすれば、お前はきつと、どんどん大きくなって、世界中でいちばん大きなクマになるだろうな。そして、ぼくはお前がいつもぼくのうしろをついて歩くように訓練するんだ。夏になったら、ぼくたちはいっしょに港へおりてゆく。すると遊覧船がはいってきて、お客さんがみんなぼ

くたちを見て、おーとかうわあとか言いながら写真をとる。お前はイヌのようにぼくのそばを離れないんだ……」

そこでマークは口を閉じて、自分の空想に酔った。世界一大きなクマと自分が、ほんとうにそんな深い愛情で結ばれたら、どんなに素晴らしいことだろう。そう考えただけで、マークは幸せで息がつまりそうになった。そうなれば、自分は世界中でただひとり、大グマをベットにした子どもということになる。うわあ！

マークは自分のやせた肩をベンの大きな固い体にすりつけた。マークは今、疲れていた。考えてみれば、彼はいつでも疲れているような気がした。日なたでベンに寄りかかっていると、体がぼかぼかしてきて、少しねむけを感じはじめた。

マークは半分閉じかかった目で太陽を眺めた。太陽は、白く雪をいだいた山の峰へ落ちかかるところだった。それはちょうど砂山の上におぼしきをのせたように、山の頂へまっすぐ乗ろうとしているように見えた。もうすぐ帰らなくてはならない。父親より先に家へ帰っていないてはならなかった。母親は、マークが遅く帰っても、なぜ遅くなかったかと聞くことはなかったが、父親はいつも理由を聞くのである。

マークがいるところから左手のほうに、緑と黄色に彩られたツンドラが、ゆるやかな起伏をなしてはるかなたまで広がっていた。濃い緑色の藪があちこちに散らばり、そ

のそばにいくつものくぼ地が穴をあけていた。きれぎれに目にはいるひとつづきの線は、海へ流れこむ小川の流れてある。そして、ずっと遠くにアリユーシャン山脈の雪をかぶった峰々が真青い空に、くっきりと山稜を浮きあがらせていた。

昼間、日の照っている時間が長くなり、海岸や付近の低地では、雪はもうとけて、雪線はずっと後退していた。谷間や峡谷の雪も消え、山麓の雪もとけて、やがて夏がくるまでには、雪は山の頂を残して、みんな消えさってしまうだろう。

マークの右手の下のほうには、漁港として知られているオルカ市の、家や店のさまざまな形をした屋根が見えた。町のまん中を走る泥道が、暖かい日ざしに照らされて黒く乾き、まっすぐ海までつづいている。そしてその道は海辺からのぼって町をぬけ、やがてはてしなく広がる平原のかなたへ消えていた。

港には漁船が十数隻つないであるが、ほかには、見渡すかぎり広々とした海原に、船の影はまったくなかった。だがそれももうしばらくのことである。

アラスカでのサケ漁の操業開始が、二週間先にせまっていた。そしてサケ漁への期待がもたらす興奮がそろそろ町を熱病のようにつつみ始めていた。マークにもそれはわかっていった。マークの父親は引き網漁をやる漁師だった。父の船はフアー・ノース号という名前だが、それはアラスカ

に数多くある引き網漁船のうちでもりっぱな部類に属する船だった。

オルカの町に住む人たちは、みんななんらかの形でサケ漁に頼って暮らしをたてていた。

「サケ漁がなかったら、オルカの町は一カ月で墓場みたいになるな」と、マークの父がいつか言ったことがあった。

いわばサケ漁はオルカの町を支えるだいたいの行事であり、それだけに、サケ漁が解禁になる日が近づくと町の人びとは異様な興奮にとりつかれるのだった。

漁船が毎日のように港へやってきて、オルカの町は見知らぬ人びとでいっぱいになる。町の沿岸には罐詰工場が七つあるが、町へ集まってくる人びとはみんな漁をしたり、その工場で働いたり、あるいは魚の揚げおろしをやるために、わざわざこの北の町へやってきた人たちだった。

やがて千隻いじょうもの引き網漁船が、遠く南のカリフォルニアやメキシコから、ひとかせぎしに集まってくる。そして、ふだんは人口が三、四百人しかないオルカの町は、急に数千人の人口をかかえた町にふくれあがるのだった。

漁期まではまだ二週間あるが、町では整備士たちが罐詰工場の整備にとりかかっており、また漁に行く男たちは、釣り具の手入れやエンジンの整備に熱中していた。丸太と金網で大きな浮き畝が作られていたが、それは、二、三週間のうちに数十万匹のサケを捕らえる畝だった。その大き

な鼠が、所定の位置へそれぞれひいていかれ、大きな罾^{おと}で固定される。また、そのほかに杙^えや針金で、べつの型の鼠が、海中の鼠場に建造されていた。

男たちは長さ三十メートルの杙^えを海底深く沈めて鼠をつくる仕事を進めており、杙^えを打ちこむ音が夜となく昼となく沿岸地帯に聞こえていた。

そうやって町の人びとが活発に働きながら、水産局のサケ漁解禁の公報を待っている姿は、マーク少年の目には、まるで短距離競走の選手たちが、いっせいにスタート・ラインにならんで、合図のピストルを待ちうけている姿と同じように思われた。

水産局の解禁発表があると、港にひしめきあっていたボートは、いっせいに海へくりだし、サケの群れを狩り求める。そして罾詰工場のドアはつぎつぎ開放たれ、逆に浮き鼠の上では、見張りの男が鼠の入口をいっせいに閉ざす。その入口は、サケ漁が解禁になる前は開けておいて、中にはいったサケを外へだしてやるためにつけてあるのだ。その活気に満ちたアラスカのサケ漁が、いよいよまぢかにせまってきたのだ。

山のヒグマたちも、そろそろ長い冬眠からさめて、ひっこんだお腹と粗い毛皮をまとった姿で雪の山をくだり、おいしい餌が集まる流れのほとりへ集まってくるころである。クマたちの間では、まず魚とりをする場所について、たいへんなけんかが始まる。しかし、いったんおのおのの

場所がきまってしまうと、あとはみんなそれぞれの場所に腰をおちつけ、卵を産みに流れを登ってくるサケを毎日食べたいだけ食べて暮らすのである。

アザラシやトドも、海に突きでた岬^{みさき}の先端にまっ黒になるくらい集まり、サケの群れに突っこんで、年に一度の大きな饗宴^{きえん}を楽しむ。そしてアザラシたちは引き網に突っこんで、網をずたずたに引き裂き、また浮き鼠^{うきね}に入っている何万という獲物をせしめようと、鼠の入口を探して何時間も泳ぎまわる。

ワシやタカ、カラス、キツネなどが、いたるところの流れや砂州で、クマやアザラシ、トドたちと、餌を奪いあつて、はでな争いをくりひろげる。そしてそういう掠奪者^{りやくだつしや}たちが、獲物を食べ散らかして去ったあとには、陸にも海にも海辺にもおびただしい数のカモメが、やかましい叫びをあげて飛び交い、みんなが残っていたごちそうの残りを、最後の一片まで、きれいに片づけてしまう。

魚泥棒が活動を開始するのは、そのあとである。カモメたちが夜のねぐらへ引きあげたあと、泥棒たちの船は夜陰にまぎれ、霧にかくれて、浮き鼠に近づく。彼らはボートをまっ黒に塗り、船名も黒く塗りつぶし、窓には黒幕をかけて、他人がとったサケを盗みに行くのである。港町の海上には、一度ならず、夜のしじまについて、激しい銃声がまきおこる。勇敢な鼠の見張りが、自分たちの獲物を守ろうと泥棒たちと渡りあう銃声なのだ。

泥棒がでるのは海ばかりではない。陸の流れで卵を産むサケを捕ることが禁じられている場所へ忍びより、産卵中のサケを網にかける泥棒もある。

この熱っぽいサケ漁はおよそ六週間つづくが、その間に罐詰工場の特主や、何千という漁師たちは、それぞれその年一年分のかせぎをあげる。そして、サケ漁は、それが始まった時と同じくらい、ある日突然、終了するのである。

罟は海から引き揚げられ、罐詰工場のドアは、つぎつぎ閉ざされる。そしてある朝、今まで町や港にひしめいた漁夫や漁船は、引き潮のように、いっせいに引きあげて、いなくなる。オルカの町はふたたび静かなアラスカの港町になり、通りは人通りが絶え、時々ま顏なじみの町の人を通るだけになる。むろん港には、十数隻の船が残るだけである。ヒグマたちはまるまると肥り、ふたたび長い冬の眠りに備えはじめる。

ただベンだけが、サケ漁の時期にも、獲物にありつくことができなかった。ベンは毎年夏が来てもずっと薄暗い小屋の奥につながれ、時どき、古いかびの生えたパンを食べ、細々と命を長らえているのだった。従ってベンは冬が近づいてきても、野生のクマのように、じゅうぶん脂肪をたくわえてふとすることはできなかった。

春とはいっても、日の光を直接体に浴びていなければ、まだ寒かった。やがてついに、建物の軒の影が、ベンとマークを日の光からおおいかくした。冷たい風が海から吹

きよせ、マークの髪の毛をかき乱しはじめた。マークの髪の色は、父親のような金色でもなく、また母親のような黒でもなかった。それは、どちらとも区別しがたい褐色をしていた。体つきは十三歳にしてはひょろついでおり、全体としてどことなく弱々しい感じだった。両頬はこけてなま白く、褐色の目は夢みるような思いに沈み、小さな顔のわりにはずいぶん大きく見えるように見えた。

マークは風の冷たさに耐えられなくなって身をおこした。それから急に驚いたように立ちあがった。家へ帰らなくてはならない。

「おいで、ベン」マークは鎖をほどこいて言った。

マークがちよっと引っぱただけで、ベンは立ちあがり、おとなしく少年のあとについて、小屋の奥の暗いところへ入っていった。マークが鎖をちゃんと元の杓につなぐと、ベンはマークの両手に鼻を押しあてて臭いをかいだ。マークの手には、まだサンドイッチのかすかな臭いが残っていたのである。ベンは赤い舌で、なにかを探るようにマークの指をべろべろなめた。

「まだお腹がすいているんだね」マークはそう言いながら、ベンの大きな頭を軽くたたいた。「もしお前がぼくのものだったら、こんなふうにお腹をすかせだすまま帰ってしまったりしないんだがな。もう行かなきゃならないんだ。またできるだけ早く来るよ」

マークは教科書やセーターをかき集めて小脇にかかえる

と、急いで家のほうへ道を下っていった。

風がはるかかなたの入江の水面を波立たせていた。アリューシャン山脈のうしろの空には、大きな雲がむくむくと盛りあがっていた。いつもよりちょっと遅くなったな、とマークは思った。太陽は今ちょうど山の頂の上にさしかかっていた。

第二章

マークの父はエレン・リチャーズと結婚した時、どこでも彼女のお望みのところへ家を建ててやると約束した。エレンはオルカ市の町の小高いところを選んだが、そこは一方に町の家々の屋根を眺めその下に入江が見おろせるようなところだった。またそこから背後にはツンドラのゆるやかなスロープが、はるか遠くの山麓まで、広びろとつづいていた。

エレンはそのツンドラの眺めが好きだった。それは自分が育った東部ワシントンの広大な小麦農場を思いださせるものがあったからである。

こうしてカール・アンダーセンは、花嫁エレンのために、オルカ市でも最もりっぱな家の部類にはいる住まいを、その高台に建てた。それは二階建ての白い家で、家のまわりは、北国の町ではほとんど見られないような、よく刈りこんだ芝生でとりかまかれていた。

マークが家へ帰りついてドアを開けると、まず最初に目にとびこんだものは、暖かい台所のまん中に立っている父の姿だった。父親は背が高く、いかにも風雪に鍛えぬかれたという感じのがっしりした体つきをしており、日光でさらされた眉と、一文字にきりっとひき締まった口もとをしていた。両肩は四角く張りだし、頭をしっかりとおこして歩いた。綿毛を思わせるみごとな金髪は、やはり長年潮風と日の光にさらされて、いくらか色がさめていた。

一瞬マークはその場に凍りついたようになって、父がなにか聞くのを待った。しかし父親は言った。

「やあ、ちようどいいところへ帰ったな。夕食の用意ができたところだ。急いで手を洗えよ」

マークはドアを閉めると大急ぎで二階にある自分の部屋へかけあがって、本とセーターを置いた。危ないところだった。これからはもっと時間を注意しているようにしなくてはならないと思った。

下へおりていくと、母親はマークにキスして聞いた。

「学校は楽しかった？」

「宿題の問題を一題もまちがえなかったよ」マークは誇らしそうに言った。

「そりゃよかったわね」母親はそう言ったが、マークが期待したほどの喜ばなかった。そして母親は聞いた。

「あんだ、お昼のお弁当、みんな食べた？」

「ぼく……ぼく、サンドイッチをひとつ、机の中へ置いて